慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	独逸経済史研究の一傾向：フランツ教授の近業について
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.9 (1941. 9) ,p.1182(106)- 1193(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19410901-0106
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410901-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

獨逸經濟史研究の一傾向

——フランツ教授の近業について——

高村象平

一

本誌二月號にイェナ大學ギュンタァ・フランツ教授の編纂する二著を紹介した後、私は同教授の近業に接することが出來た。題して「三十年戰爭と獨逸民族——人口史的・農業史的研究」(Günther Franz, Der Dreissigjährige Krieg und das deutsche Volk. Untersuchungen zur Bevölkerungs- und Agrargeschichte. Jena. 1940.) とふ。ここにその內容を紹介し、併せて同書中に教授が特に强調される點を擧げ、以て最近の獨逸に於ける經濟史研究の一傾向を窺ふ緣としたい。

フランツ教授がこの書に述べられてゐるところは、端的にいへば、一六一八年から四八年に亙つた三十年戰爭が獨逸人口に及ぼせる影響と、それによつて生じた農業制度の變容とである。教授自らの言葉によれば、本書の課題は「三十年戰爭によつて生じた人口減退が、特に農村において如何に大であつたか。又戰後の再植民は如何なる形態で行なはれたか。更に戰爭は如何なる農業史的結果を生んだか」を示すにある(一三頁)。それはイェナ大學のゼミナ

ァル參加者の協力に由るところ多きもの、從つてこの書中には新資料に基づく所說は殆んど見出されないが、既に發表された極めて多數の個別的研究はよく統一綜合されて、以て全體的觀察が下されてゐる。

一體三十年戰爭によつて生じた獨逸人口喪失については、從來次の二つの見解が對立してゐた。一は當時の獨逸經濟文化が蒙つた災害はすべて該戰爭に負ふものとし、人口減退を過大評價する。例へば J. J. C. Grimmelshausen (Abenteuerlicher Simplicissimus, 1669.)や、H. M. Moscherosch (Wunderliche und warhaffige Gesichte Philanders von Sittewalt. 1642-3.)や、G. Freytag (Bilder aus der deutschen Vergangenheit. Bd. 4.) 等に說かれるものとれである。これに對して B. Erdmannsdörffer がその著 Deutsche Geschichte vom Westfälischen Frieden bis zum Regierungsantritt Friedrichs d. Gr. Bd. 1. 1892. に過大評價を警しめて以來、R. Hoeniger (Der Dreissigjährige Krieg und die deutsche Kultur, Preuss. Jbb. 138. 1909.)や H. Preuss (Die Entwicklung des deutschen Städtewesens. I. 1906.) は、舊說を全く否定する立場をとつた。例へばヘェニガァは人口減少を僅か五%のみと算定し、戰亂は國富を消滅せしめずその所有者を變化せしめたのみといふ。そして彼は戰後の獨逸衰頹の原因を、戰爭にではなく、獨逸帝國の分裂に求めたのであつた。

以上の新舊兩說に對して、フランツ教授の採る立場は、大體シュモラァ教授のそれに似る。それは三十年戰爭は地域的に甚だ相違せる影響を及ぼしたと做すものであるが (Vgl. G. Schmoller, Das Städtewesen unter Friedrich Wilhelm I.)、この先覺の推考を、フランツ教授は本書において裏書したのである。その他方、全體としてみれば、戰爭による人口喪失は、次に紹介する如く可成りの程度のものであつたことをも示したのである。素より人口減少の數字は、これを精確に求め難い。且つまた或る地方における戰前と戰後との人口數を知り得ても、そこに現はれ

た差異は、戰爭そのものによつて生じたものとは斷じ難い。殊に三十年戰爭當時には、流行病特にペストの蔓延著しきものがあつたから、これに由る死亡と戰鬪に關聯しての死亡とは判然と分ち得ず、ここに教授は、兩者相合して戰爭の結果による人口喪失と看做さざるを得なかつた。

二

第一章「人口喪失」においては、被害少き地方として、北獨逸、アルプ地方、ザクセン選帝侯領を擧げ、次に被害甚しき地方として、東部獨逸（ブランデンブルク・ポマァン・メクレンブルク・シュレジィエン・ペェメン）、中部獨逸（マグデブルク大司教領・チュウリンゲン）、西南獨逸（ヘッセン・ファルツ・エルザァス・バァデン）、南獨逸（ウュルテムベルク・バイェルン・フランケン）の諸地域に分つて具體的に人口變動を考證されてゐる。その個々についての研究の跡を辿ることは避け、ここにはその綜括を紹介しよう。曰く、「以上諸地方の間にあつて、戰爭中その住民の數を增加し得たのは、極めて小局部のみである。西北獨逸（ニィダァザクセン・ウェストファアレン）並びにザクセン選帝侯領では、全體としては戰前の狀態を維持し得た。これは三十年間の自然的增加部分だけが戰爭の犧牲となつたことを意味する。これに對して、主なる被害地域では、戰爭によつて人口の六〇—七〇％が失はれた。これに屬するのは、メクレンブルク・ポマァン・ヘッセン・ファルツ・ウュルテムベルク等である。これ等に次いで人口喪失約五〇％の地方は、ブランデンブルク選帝侯領・マグデブルク大司教領・チュウリンゲン・エルザァス・バイェルン・フランケン等であり、シュレジィエン・ペェメンは各々その人口數の約二〇％を失つただけであつた。いまこれ等について愼重に算定するならば、三十年の苦難の歲月の間に、獨逸農村人口の約四〇％が戰亂と流行病との犧牲に供されたことになり、他方、都市人口の喪失は三三％と推定することが出來る」と（五一頁）。

然しながら、この全人口の三分の一餘にも達する減少も、獨逸民族の生活力を破壞し去るには至らなかつた。三十年戰爭終了の頃から歐羅巴の人口は一般に增加しなくなつてゐる。例へば佛蘭西の人口は一六六〇年から一七五〇年に至る間に、二千四百萬より千八百萬に減じ、英吉利のそれは同一年月間に五百五十萬より六百萬になつてゐるに過ぎず、その他白耳義・瑞典・丁抹・ロムバルディァ等孰れも夫々人口減少の傾向を示してゐる。その原因は戰爭とか國外移住とかによるといふよりは、概ね出產率の減退、生活水準を維持するための多產の忌避であつた。然るに歐羅巴諸國の間において、ひとり獨逸は特殊的地位にあつた。即ち戰爭の被害を蒙らぬ西歐・中歐諸國と異り、戰禍による貧窮化、更に政治的分裂と權力喪失との悲境に投げ込まれたにも拘らず、獨逸民族はその逞しき生への意欲・生活力を出生增加を以て顯示したのであつた。フランツ教授の推定さるゝところによれば、一七五〇年の獨逸人口は、百年前（三十年戰爭終了直後）よりも約七五％增であつた。「從つて獨逸民族は戰爭による人口喪失を、一世紀の間に補充したのみならず、全體としては、縱令少數なりとしても尙總人口數の增加を示したのであつた。」（五三頁）

この他方において、三十年戰爭は注目すべき結果を惹き起してゐる。それは戰後に大規模な人口移動が獨逸諸地方間に行はれたことである。住民と土地との關係は緩められ、戰火によつて農場を荒廢せしめられた農民は新しい故郷を求めて他地に移出した。租稅及び諸負擔の增徵を避けての移住、そして植民者に與へられた經濟的利益を享受するための移住。のみならず、新住地における二年乃至六年の公課免除期間を經た後これを放棄し、この種の利益を求めて再移住する者も尠なくなかつた。かくて農村人口は放浪狀態に陷つたとさへいふことが出來る。しかもこの傾向は宗教的迫害によつて一層促がされ、外國人の移入によつて强められることになつた。然しながら、これは戰後における再建が外國人勢力の參加を俟つてはじめてなしとげられたといふ意味ではない。「宗教的亡命者、墺

太利の追放者、ベェメンの移民、瑞西のメンノ派信仰者等は、新教の諸地方に收容され、彼等はその再建を促進した。これ等外國人と獨逸の新植民者とが相結んだことも稀ではないが、然しそれは全體としては僅かなものであつた。獨逸農村の再建は、全く獨逸民族の生活力のなすところだつたのである」。（五六頁）のみならず、それは農村についてだけではなく、都市の再建にも亦いひ得るところであつた。但し都市にあつては、農村におけるよりも外國移民の量的影響はより大なるものがあつたことは否めない事實である。この戰後における人口移動は、本書第二章「新植民者の素性」で詳細に取扱はれてゐる。

三

概括的に見るならば、人口喪失の特に甚だしき地方は、然らざる地方からの移住者を吸收する謂はゞ「低氣壓地域」であつた。（九三頁）

戰時中、中立を守つて多くの利を累ねた瑞西も、ウェストファレン媾和締結後には戰爭景氣も一過して經濟不況に陷り、ここに一定量の人口しか給養出來ぬ地勢と末子相續制とを有する同國の過剩農民・農村手工業者は、隣接する南獨逸地方に移住を開始するに至つた。その多くは既婚者であつた。加ふるに同國の貧民行政によつて、被保護者の移出が計畫的に促進されることもあつたのである。（六五頁）然し瑞西移民には、宗教的迫害を動機とする者は殆んどなかつた。たゞ彼等の有する信仰の如何により、その移住先は個々に決定せられたのである。

「チュウリッヒ地方からの移住者は殆んど全部ファルツ選帝侯領に定著した。ここはライン上流地方における唯一の新教的大領邦であつたのである。又カトリック的三原州（ウリ、シュウィッツ、ウンタァワルデン）の農民は、ライン上流のカトリック地域を求めた。殊にエルザスにおいては、新領主たる佛蘭西王室の政策として、カトリックみ信者の

が、新植民者として受容されたのである。」ファルツに移住したのは瑞西人のみではない。「ネェデルランドの新教徒も亦ここに來住した。又ルッタァ派の地域に屬するヘッセン・イゼンブルク等には、チュウリンゲン・フォゲルスベルク・更に戰禍を受けること尠なかつたマァルブルクの背面地の諸農民が移住した。概していへば、異つた信仰者の移住を許しこれに信仰自由を與へたのは、エルバッハやハナウ＝リビテンベルク等の小領主だけであつた」（六六頁）。

これ等と並んで、信仰上の理由から獨逸に移住した者も尠なくなかつた。フランドル人・ワルウン人の移住の如きは第十六世紀に既に行なはれてゐたが、戰後はこの種の亡命者は特にその數を增した。佛蘭西のユグノォ、サヴォイのワルド教徒、瑞西やネェデルランドのメンノ派信者等これである。彼等は多くその故國における最良の國民に屬した（八二頁）。そしてその移住と共に、牧畜・農耕・鑛山・織物等々について優れた技術をも移植したのであつた。それは上部ライン地方にのみ行なはれたのではない。フランケン地方に特に多數來住した墺太利追放者にも、又ザクセンに多く移住したベェメンの宗教的亡命者にも妥當する。

東部獨逸について見れば、シュレジィェンにおける新移住者は獨逸本國のあらゆる地方から來たものであつたし、ブランデンブルクでは、その南部には隣接せるザクセン、就中ラウジッツからの移入、更にベェメンからの移入を主とし、北部では新移住者の殆ど大部分がメクレンブルク、ニイダアザクセン地方からの者を以て占められてゐたのである。尙戰爭直後には大選帝侯フリィドリッヒ・ウィルヘルムによつて和蘭人が召致されてゐるが、このブランデンブルクにおける瑞西人・ワルド教徒・ファルツ人・ユグノォ等の移住は第十七世紀七〇年代以降のことであつた。

要約すれば、南獨逸は瑞西・チロル・墺太利等の謂ゆるアルプ地方人を以て植民され、ここでは北方種族の要素は薄められざるを得なかつた他方、北獨逸ではニィダァザクセンやスカンヂナヴィア地方からの新移住者によつて北

方的要素は一層濃厚化されたのである。然し個々にはかゝる差異ありと雖も、三十年戰爭は結局すべての獨逸種族を混淆せしめたのであつて、この混合の中から新農民層が成立するに至つた。新移住者が決定的に定着して新農民層を形成するまでには、實際には數十年の經過を要したのであるが、然しこの三十年戰爭の行なはれた第十七世紀は、ひとり獨逸民族體の構造を變化せしめたのみならず、獨逸農民階級――少くとも東部獨逸の農民――の權利の「運命的轉換」の世紀であつた。（九三頁）第三章「戰爭の農業史的結果」は、この農民階級の權利の變化を取扱ふ。

四

フランツ教授によれば、三十年戰爭によつて新たに耕地が潰滅した事例は極めて少ない。潰地の多くは戰前既に潰滅化してゐたものであつた。從つて戰爭のために耕地面積が減少することは殆んどなかつた。然し村落耕地が一時的になりとも荒廢した場合、それは概ね土地所有關係の變化を惹き起したのであつた。加ふるに戰爭終結後は、獨逸のみならず歐羅巴一般に農業恐慌が招來された。ここに農民階級の負債は增大せざるを得なかつたのである。然しながらこれ等の障碍にも拘らず、農村の再建は進められて行つた。それは如何なる農業制度となつて結果したか。

「エルベ河以西の本國獨逸の植民地域では、戰爭によつて農業機構は決定的に變化せず、農民保有地と地主所有地の關係が本質的に推移することもなく、又農民の領主乃至國家に對する權利も原理的に變ることなかつた。西南獨逸のレンテングルンドヘルシャフト、中部獨逸のグルンドヘルシャフト、西北獨逸のマイヤァ制は、孰れも戰前における如くに再建された。僕婢奉公强制も、それが貴族的所有者により新しい隷屬關係として利用されることなきやう國家が監督し得た限り、農民の自由を阻碍することはなかつた。」（一〇四頁）然し「東部獨逸における諸關係は、これと全く相違した。ここでは戰爭は農民保有地を著しく且つ繼續的に減少せしめ、それに伴つて農民を世襲的隷屬關係と體僕制度との中に追ひやつたのである。」（一〇五頁）

次いでフランツ教授は、ブランデンブルク・ラウジッツ・シュレジィエン・ベェメン・メクレンブルク・ポマァンの諸地方におけるグウツヘルシャフトの發展を個々に檢討した後、次の如く述べてゐる。「東部獨逸のグウツヘルシャフトの成立には多くの政治的社會的經濟的原因を有し、それをここにすべて述べることは出來ないが、農民の地位の惡化と大規模農業經營への轉化とは第十六世紀に既に始まつてをり、それは第十九世紀に至るまで續いたのであつた。然しこの間にあつて、三十年戰爭のあつた災厄の歲月は最も重要な段落を示したもの、即ちこの三十年間にグウツヘルシャフト發展上の多くの障碍條件は排除されたのである」。（一一八頁）

グウツヘルシャフト進展を決定的ならしめたものは、戰爭の結果たる人の不足・農民の不足であつたと著者はいふ。「農場主が荒廢した農民保有地をそのまゝ放置することを欲しない時は、これを彼の農場内にとりいれねばならなかつた。又農業勞働力を確保するためには、農民を土地に緊縛する要があつた。加ふるに農民及び騎士の所有する資本の缺乏がある。農民は獨力でその保有農地を再建し得ず、ここにその負債の增加は賦役の增徵となつて結果した。即ち「三十年戰爭は東部獨逸の自由農民層を消滅せしめ、この地方を終極的に騎士農場の地域と化せしめたのである。」

かくてフランツ教授は次の如き結論を下す。「獨逸民族史上における三十年戰爭の地位について語る時には、右の發展についても亦指摘せねばならない。それは本質的に人口史的原因を有するものであり、その作用において獨逸民族體の構造に決定的影響を與へたものであつたと。（一二〇頁）

五

以上がフランツ教授の近業の主内容である。一讀して奇異に感ぜられる點は、東部獨逸における人口移動・農業機構の變化について可成りの紙數がさかれてゐるにも拘らず、東プロイセンについては殆んど言及されてゐないことである。その理由については何等明記されてゐない。たゞ註記として、「東プロイセンでは三十年戰爭よりは、一六五六―五七年の第二次瑞典・波蘭戰爭、更に一七〇九―一一年のペストの流行が重要であり、これ等によつて多數の死滅村落を輩出し、人口構成は著しく變化することになつた」（二七頁）と述べられてゐるのみである。恐らくこれが教授をして、この地方に關説することを敢て省略せしめた理由なのであらうが、それにしても東プロイセンが除かれてゐることは、獨逸全體の觀察の上において物足らなさを感ぜしめる。

本書の副題にいふ「人口史的研究」には前二章が當てられ、「農業史的研究」には最後の一章が割かれてゐる如くである。然しその第三章も前記の如く、「人口史的原因」に重點を置いたものであるから、本書全體としては「人口史的研究」に終始したものといつても過言ではあるまい。しかもこの點に、私が本書を以て獨逸における經濟史研究の一傾向が現はれてゐるものと做す所以が存する。それは獨逸「人口史」乃至「人口史的研究」が、現下の獨逸經濟史學界の一つの有力な部門を構成してゐると思はれるからであり、それが同國における國民的要請に應じたものであると考へられるからである。

六

今から十年前、ダンチヒ文書館長エェリッヒ・カイザァ教授は人口史研究の要を說かれたことがあつた。曰く、「世界大戰の不幸な結末は、獨逸民族の本質と發展とについての問題を獨逸歷史學の宿命的課題とした。獨逸民族が暴力を以て分裂せしめられ抑壓され、その古來の生活領域の大部分が奪はれ、しかも分散せしめられた部分を再び結合する希望の念が燃えたつことと激しくなるにつれて、過去の變遷の間にくりひろげられた獨逸民族の生長と擴播とを檢討することが要求され、ここに歷史學は、獨逸民族の歷史的發展を研究すべき國民的課題を與へられたのである。」

「これに對して『獨逸民族史』と題した數多くの著作が、既にこの要求を充してゐるではないかと考へられるかもしれない。然し詳細にみるならば、それ等は、獨逸民族の生活について說くよりも、獨逸の地に生じた諸事象、獨逸帝國・諸分邦・諸階級の運命を多く取扱つてゐるものであることが解る。それ等が他の『獨逸史』と相違する點は、歷史を動かす主體として、支配層よりは大衆を考察すること多く、政治的展開よりも經濟發展を重要視するだけに過ぎない。その他方、獨逸民族の全體的發展の省察については、謂ゆる政治史的著作に遙かに及ばないのである。」

「いままでの獨逸歷史學の個々の研究方向を、何等先入見に捉はれずに觀察するならば、それ等すべてが夫々の特有の見解に從つて、獨逸民族の生活の個々の斷面のみを吾々に示すものだけに過ぎないことを認めざるを得ない。研究者が選び出した文化領域に應じて、彼の研究にとつて規準となる或る社會階級がとりあげられてゐるが、然し獨逸史を動かすものとしては、獨逸民族の他の部分が考察されねばならなかつたことが尠なくない。といふのは、『生產階級・僧侶階級・軍人階級』として古くから擧げられてゐる政治的經濟的精神的發展には、種々なる社會層が結ばれてゐることを恆とするからである。」

「謂ゆる文化史的記敍も亦『獨逸民族史』の目標に到達することが出來ないでゐる。それは凡ゆる諸文化領域を綜括することに努め、老大な素材に沒頭したのであつたが、然し創りあげたものの蔭に、これを創り出した人はおしやられて了つた。」「獨逸民族文化史においては、民族をその文化の背後に消失せしめる危險甚だ多いのである。」（Erich

Keyser, Die Geschichtswissenschaft. Aufbau und Aufgaben. 1931. S. 115-6.)

この批判は、ひとり從來の獨逸民族史・文化史にのみ放たれたばかりでなく、それは經濟史的著作にも亦適用せらるべきものであつた。カイザァ教授は右の批判の後に、獨逸民族の在り方を知る上に、民族を以て歴史的發展のトレェガァとして考察し、人間をその仕事の創造者として認むることを忘却すべからざること、更に獨逸民族の成立と變遷との研究を以て、獨逸歴史學における緊急の要務となすことを提唱したのであつた。端的にいへば、それは獨逸人口史の研究である。然しながら、教授が最初一九二七年シパイヤァにおける獨逸歴史家大會の席上でこれを主張され、次いで翌二八年オスロォにおける國際歴史家會議でも説かれるところあり、又前記云一年の著書にその見解を纒められた頃には、尚その反響は頗る寥寥たるものであつた。寧ろ默殺されたといふ方が眞に近かつたであらう。それはこの年代における國際情勢、それを反映した獨逸歴史學界の狀態の然らしめるところでもあり、又縱令教授の提唱に應ぜんとする史家ありとしても、それは容易な仕事ではなかつたからである。人口史といふ場合、それは人口の數量的問題のみが把えられるのではない。質的問題にも亙らねば無意味である。從つて人口問題の領域には民族の基礎的構成に關する凡ゆるものがとりいれられねばならない。ここに「獨逸人口史の概念・資料の整備・時間的空間的範圍の決定が一應なりとも纒められるまでには、長い年月に亙る研究と熟慮とを必要とした」のであつた。(Erich Keyser, Bevölkerungsgeschichte Deutschlands. 1938. S. 8.)

然るに一九三三年以降における獨逸の政情一變は、教授の多年の提唱に實行力を賦與するやうになつて行つた。民族的歴史觀の高唱と國民社會主義によるその世界觀の是認。ここに前述の如き歴史發展上における民族の眞價認識、そしてその成立乃至推移についての研究が、他の種の研究に對して優位に置かれる情勢が醸し出されたのであつた。それは經濟を以て或る民族の生活領域の部分に外ならぬとし、この民族的經濟を以て經濟學の對象とすると同じく、經濟史も亦民族的經濟史の研究を以て如何なるものよりも優越すると做すのである。最近フェニング氏が、民族理念を以て國民社會主義的世界觀の中心點とし、それを「種族、地域、歴史」の三要素の融合として説いたのは(Andreas Pfenning, Die Bedeutung des biologischen Gedankens für die Nationalökonomie. Schrollers JB. 1939. S. 273.)、この民族的經濟史即ち獨逸經濟史研究の新しい傾向に對する經濟學者の支持と看做すことも出來よう。又先般私は獨逸ハンザ研究の動向に關説して、「最近の主潮はこれを一言に盡せば、『物の研究』から『人の研究』に移つたことである」と述べたが（社會經濟史學、第十卷第十一・十二號、二三三頁）、獨逸經濟史のこの分野におけるかゝる動きも、その基底に前記の民族的經濟觀が横たへられてゐることからつくり出されたものといはねばならない。

かゝる獨逸學界の動向を考慮して本稿に紹介したフランツ教授の近業に接するとき、それは獨逸經濟史研究を人口史的觀點に立つて再吟味した一つの企てとして興味深いものがある。今後この種の檢討が獨逸民族經濟史のすべての時期乃至問題について引き續き試みられるか否かは憶測の及ぶ限りではないが、とにかくこのフランツ教授の近著は經濟史研究の新しい傾向を具體化したものと評價することは許されるであらう。一九三三年以來カイザァ教授は Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte 誌上において、新しい民族的歴史觀の結晶たる獨逸人口史に關する年々の諸業績を綜括的に批判されてゐるが(Vgl. Bd. 26. S. 270 ff., Bd. 27. S. 165 ff, Bd. 28. S. 51 ff, Bd. 29. S. 45 ff, Bd. 30. S. 164 ff., Bd. 31. S. 57 ff.)、このフランツ教授の近業に對して今後如何なる批判が下されるかは興味なしとしないのである。